

令和 7 年度  
入学者選抜学力試験問題

前期日程

国 語

注 意

1. 解答は別冊の解答用紙の所定の解答欄に書くこと。
2. 文学部志望者はⅠ・Ⅱ・Ⅲを、生活環境学部志望者はⅠ・Ⅱを、解答すること。
3. 文学部志望者は、解答用紙の表紙を含むすべてのページの※印欄に、  
生活環境学部志望者は、解答用紙の表紙及び1ページと2ページの※印欄に、  
受験番号・氏名を記入すること。  
受験番号は、本学受験票の受験番号を記入すること。  
※印欄以外の箇所には、受験番号・氏名を絶対に書かないこと。
4. 試験終了後、この問題冊子は持ち帰ること。
5. 総ページ数  
問題冊子—9ページ  
(うち白紙—1ページ)



I つぎの文章について後の問に答えよ。(文学部・生活環境学部)

遊びはすべて、

にすぎない。<sup>1</sup>自由という

を乗り越えたものになる。遊

びは

身をかくしてしまう。

また、<sup>2</sup>あらかじめ

誤

「<sup>ひびょう</sup>謬」に陥ることになるだろう。子供もそれはそれとして、

自由がある。

に行なわれる。ただ遊びが<sup>3</sup>

に縛られるようになる。

かくてここに、

の特徴が続く。

遊びは

でもない。そこから

活動の力<sup>A</sup>コ

ウの世界に入る

と懇ろに「お父さん」と言った。

すると子供は「お父さん」<sup>4</sup>

、つまり「トウスイ」を覚えるほどの

気高い美しさやスウコウさの極致をも窮めう

る。

。「ありきたりの」生活から「ユウリ」した

生活過程

のケンガイに立つ<sup>E</sup>

それはそれとして、ともかく人間の遊びは<sup>5</sup>

を見つけるのである。

ところで、遊びが

。否、そうではない。なぜなら

と別の手段によっている。

(ホイジंगा『ホモ・ルー・ダンス』里見元一郎訳による)

(注) ○決定論——あらゆる出来事は、その出来事に先行する出来事のみによって決定している、とする立場。

問一 傍線部A～Eのカタカナを漢字に改めよ。

問二 傍線部1について、「自然の営みの過程」とは具体的にどのようなことを指すか、文中の表現を用いて述べよ。

問三 傍線部2について、

(a) 「あらかじめ仮定された遊びの効用」とは何か、端的に述べよ。

(b) なぜ「その人は一種の「未解決の問題を前提として立論する誤謬」に陥ることになる」のか、理由を述べよ。

問四 傍線部3について、

(a) 「遊びが文化的機能」になるとはどういうことか、文中の表現を用いて述べよ。

(b) 「遊びが文化的機能となった時はじめて第二義的に、当為とか、任務とか、義務といった概念との結びつきに縛られるようになる」とはどういうことか、「第二義的」の意味するところを明らかにしつつ説明せよ。

問五 傍線部4について、子供が父親にこのように言った理由を、著者の指摘する「遊び」の特徴、性格をふまえて述べよ。

問六 傍線部5について、「人間の遊び」が「より高級な形式に属」し、「聖なる領域の中にその場を見つける」ものであってもなお、「遊び」と言い得るのは、どのような点においてであるか、文中の表現を用いて述べよ。

II

つぎの文章は『しのびね』の一節で、「少将」が、京都の嵯峨野で紅葉狩りをしているときに、ある庵にいた姫君の姿をかい  
ま見て、その場を離れて後日の話である。これについて後の間に答えよ。(文学部・生活環境学部)

つくづくと思ひ続けるに、かくて日数ひかずをも経へば、もしかりそめに物忌ものじみなどに籠こもりて、たち帰らん時、行方ゆくへも知らずはいかが  
すべからん。さらば見ではえあるまじく、面影おもかげ恋こひひしかるべければ、そのわたりなる人にたづねさせ給へば、「さしていかな  
る人とは、くはしく知り侍らず。八月ばかりより、忍Aびておはします。今年中は、かくて過Bし給ふべきやうにうけたまはり  
侍る」といふ。

<sup>2</sup>いかさまにも、この気色ゆかしければ、またたち帰りて、「誰とかたづぬべからん」と思ひわづらひ給ふに、「中納言の君  
や、うちへまるり給ひね」といふ声につきて、たちより給ひて、隨身して、「ここに、人の月にひかれてあくがれ侍る。家路  
も忘れて夜更よふけ侍る。御宿申さんや」といはせ給ふ。いと思ひかけぬ狩衣姿の男なり。「いかなる人にておはすらん。このあ  
ばら屋には、いかでか明かし給ふべき」とやすらふに、君さしより給ひて、「いと苦Bしからぬ者にて侍る。ただこの御簾みすの  
前に、御宿直このあ申し侍らん。夜も更けぬれば、いくほど侍らじ」と宣のたまふ御気色の、世の常の人とも見えすうつくしければ、「申  
し侍らん」とて入りぬ。

<sup>4</sup>尼君に、しかしかのことと語り聞こゆ。「香はしかりつるも、これにやおはすらん。このあたりたたずみ歩あき給ひつらめ。  
用意なきけはひ聞きやし給ひぬらん」とささめく。「いかでなさけなく帰し奉らん」とて、あたりうち払ひ、御茵しとねさし出でた  
り。「露もたまらぬ庵なれど、旅はさぞと思おぼし許し給へ」とて、いと馴れたる若人出でたり。まづうれしく、端の方にうちな  
がめて居給へる御様の、光かかやきて目Cもあやにおどろかるる。<sup>5</sup>一目も見知り奉らねども、なつかしげにうち語らひ給ふ。  
「行方もなくまよひ侍りつるに、うれしき旅寝をもするかな。同じくは導き果て給へかし」とて、少しほほゑみ給へば、「なほ  
奥へはおはしますべきところも侍らぬものを」とおぼめけば、「うちつけに思ふこと聞こゆるは、あさきやうなれども、この  
世ならぬことにや、立ち舞ふべき心地もし侍らぬを」とて、

ア 世の常の 色とや思ふ ひまもなく 袖の時雨に 染むる紅葉を  
とて、散りくる紅葉を手まさぐりにし給へば、ただかく、

イ さらぬだに 晴れ間少なき 山里に 袖の時雨を 何と添ふらん

<sup>6</sup> 御心なぐさみ給ふべき紅葉の色も侍らぬものをと、おほかたにいひなせど、「うたてくも宣ひなすかな。おほろけにてはたづねまらぬもの。これも昔の契りかと思しなせかし。数ならぬ身なればことわりぞ」と、まめやかに年月思し染めたるやうにいひなし給ふ。昨日今日見そめて宣ふやうにもなければ、「いかにして、<sup>7</sup> かかる人おはしますと聞き給ひけん」と、おぼつかなし。

(注) ○中納言の君——姫君の侍女。

○隨身して——自分(少将)の側近に。

○尼君——姫君の母親。

○いと馴れたる若人——応対に慣れた若い女房。

問一 傍線部A、Dについて、簡潔に現代語訳せよ。

問二 傍線部1について、言葉を補いつつ、現代語訳せよ。

問三 傍線部2について、どういふことか、わかりやすく説明せよ。

問四 傍線部3について、少将はなぜこのように申し出たのか、わかりやすく説明せよ。

問五 傍線部4について、「しかしかのこと」が指す内容を、人物や言動を具体的にしつつ、説明せよ。

問六 傍線部5について、なぜ少将は「なつかしげにうち語ら」うのか、説明せよ。

問七 少将の歌ア、若人の歌イおよび傍線部6について、

(a) 歌アには、どのような思いが託されているか、「袖の時雨」という表現に留意しつつ、説明せよ。

(b) 歌イおよび傍線部6について、「若人」はどのようなことを伝えようとしているのか、二首のやりとりを踏まえ

つつ、わかりやすく説明せよ。

問八 傍線部7について、「かかる人」が誰かを具体的にしつつ、現代語訳せよ。

III つぎの文章について後の問に答えよ。ただし、設問の関係で返り点・送りがなを省いた箇所がある。(文学部のみ)

唐玄宗以<sub>二</sub>韓休<sub>一</sub>為<sub>二</sub>門下侍郎・同平章事<sub>一</sub>。休為<sub>レ</sub>人峭直、不<sub>レ</sub>干<sub>二</sub>榮利<sub>一</sub>。及<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>相、甚<sub>ダ</sub>允<sub>二</sub>時望<sub>一</sub>。上或<sub>イハ</sub>宮中宴樂、及<sub>レ</sub>後苑遊獵、小有<sub>二</sub>過差<sub>一</sub>、輒<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>曰、「韓休知<sub>ルヤ</sub>否<sub>ク</sub>。」言<sub>ヒ</sub>終、諫疏已<sub>ニ</sub>至<sub>レリ</sub>。上常<sub>ニ</sub>臨<sub>レ</sub>鏡、默<sub>トシテ</sub>默<sub>トシテ</sub>不<sub>レ</sub>樂。左右曰、「韓休為<sub>レ</sub>相、陛下殊<sub>ニ</sub>瘦<sub>一</sub>、何<sub>ゾ</sub>不<sub>レ</sub>逐<sub>レ</sub>之<sub>ヲ</sub>。」上歎<sub>ク</sub>曰、「吾貌雖瘦、天下必肥。蕭嵩奏<sub>スルニ</sub>事、常<sub>ニ</sub>順<sub>レ</sub>旨、既<sub>ニ</sub>退<sub>キテ</sub>、吾寢不<sub>レ</sub>安。韓休常<sub>ニ</sub>力<sub>ニ</sub>争<sub>フモ</sub>、既<sub>ニ</sub>退<sub>キテ</sub>、吾寢乃<sub>ニ</sub>安<sub>一</sub>。吾用<sub>ニ</sub>韓休<sub>一</sub>為<sub>ニ</sub>社稷<sub>一</sub>耳、非<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>身也。」

(宋・葛洪『涉史隨筆』による)

(注) ○韓休——人名。 ○門下侍郎・同平章事——唐代の宰相職。

○峭直——嚴格で一途なさま。 ○允時望——世の期待に合致した。 ○諫疏——諫言の上奏文。

○蕭嵩——人名。 ○退——ここでは、退朝すること。 ○社稷——国家。

- 問一 二重傍線部 a、s、d の文中での読みを、ひらがなのみを用いて示せ。
- 問二 傍線部 1 について、「楽」しまなかつたのはなぜか、説明せよ。
- 問三 傍線部 2 について、「逐之」の内容が分かるようにして現代語訳せよ。
- 問四 傍線部 3 について、どういうことを述べているのか、わかりやすく説明せよ。
- 問五 傍線部 4 について、「寝乃安」となるのは、玄宗が韓休をどのように評価しているからか、この文章の内容に即して説明せよ。
- 問六 傍線部 5 を漢字ひらがなまじりで書き下せ。

## 出典

科目	大問 番号	著者名	作品名	出版社名	掲載ページ	出版年等
(前期日程) 国語	I	ヨハン・ホイジンガ 著 里見 元一郎 訳	ホモ・ルーデンス	講談社学術文庫	pp.26-30	2018.3
	II	不詳	しのびね	笠間書院 (『中世王物語集』)	pp.13-15	1999.6
	III	葛洪	渉史随筆	大象出版社 (『全宋筆記』第六編 九)	p.52	2013.7